

# 観客席（改）

作 寺山修司  
脚色 萬野展

女 七列目右三番の女。  
男 学生風の観客。

【注記】 寺山修司作「観客席」（一九七八年初演）に、萬野が若干の脚色を加えた。

観客は我々が思うよりもはるかに想像力にみちあふれている。  
それを利用しない手はない。

ティーン・スピルバーグ

## 劇になる条件

観客席にて。

客席に座っている学生風の男に、カラス服の若い女の子が通路から話しかける。

女の子 悪いけどここアタシの席なんだけどな。

学生風の男 ……。

女 ねえここアタシの席なのよ。

男 だって、僕のほうが先に座ったんですから。

女 先か後かなんて聞いてないわよ。前から七列目の右から三番目。これはいつでもアタシの席なのよ。

男 だって自由席でしょ。

女 自由席？ ジュウ・セキ？ 自由って意味わかって言ってるの？ 学校で習わ

なかった？ 自由を主張するなら義務を果たしてからにしたらどう？

男 義務ってなんですか。

女 義務もわかんないの？ 義務もわからずに自由席だって？ 話になんないね。

男 たとえばあんたはどれだけこの席のことを理解してるの？

女 はあ？

女 アタシはこの前から七列目右から三番目ともう三年もつきあつてきてるの。要

するにここはアタシの住所なのよ。アタシはこの席でいるんなものを見てきた

んだ。

女、いきなり芝居がかって、

女 「時計台が燃えている！ 見てごらんバシリニコフ。あの炎のなかにあの人が

いる。わたしを連れて逃げると誓ったあの人が。あれが身の程知らずな革命戦

士とやらの末路。ああ馬鹿馬鹿しい！ もうお帰り、帰って水曜ロードショー

を見るがいいわ！」知ってるでしょ。コジンスキーの「神々の黄昏」のなかの

ワックスマン夫人。

男 全然知りません。

女 知らない？ シ・ラ・ナイ？

男 ……知りません。

女 あんたが知らないとなにか不都合なことでも？

男 いや、別に…

女 あのね、あんまり自分を特別扱いしないほうが身の為よ。世の中にはあなたの

知らないこと、あなたが知ってる必要のないこと、あなたが知っても仕方

のないこと、あなたが知っちゃいけないことが、星の数ほどあるの。なんでも

知っていたいの？ 自分の知らないことがあるのがご不満？ 聞けばなんでも

教えてもらえるの？ ただ座ってるだけで笑わせてもらえる、泣かせてもらえ

る、感動させてもらえる！ お生憎さま、あんたはただの観客。そしてここは

観客席。

女、いきなりバカでかい声で、

女 「魚雷発射用ー意ッ！ 目標は敵艦コシジフブキ。エンジン音を魚雷にセットせよ。したか？ よし発射！ いや待て！ 取り消し！ ごめん！ 冗談！ 朝飯の用意！ 卵は半熟でネ」…どうだい？ 同じくコジンスキーは「炎の渚のシンドバッド・復讐篇」から、片目のカークライト船長だ。あたしがこのセリフをはじめて聞いたのは、この前から七列目右から三番目の席だった。キャブテン・カークライトを演じたのは名優ギニユール・エロフリン。輝いてたわ。身長76センチのエロフリンが、とても大きく見えた。

男 それって子役ですか？ イダダダ…

女、そんなバカなことを言うのはこの口か、と言わんばかりに、無表情に男の口をひねり上げている。

女 エロフリンは八十八歳のアカデミー俳優よ。惜しいことに去年の夏、三度目の来日の際、回転寿司のサバにあたって死んだわ。ああ、あの夏の日…、日本中の演劇ファンが三分間黙祷した。そしてサバを買ってきて石で頭を潰した。覚えてるわ、あのサバ不足の夏。

男 全然知りませんけど…（女に睨まれ）知らなくてもいいんですね。

女 アタシはこの席、この位置、この角度から、あらゆるものと関わってきた、座ってないときも、劇場が空っぽのときも、前から七列目の右から三番目はアタシの席だった。アタシはここから、四季の移り変わりを見てきた。

男 あ、劇団四季テレビで見ました。イデデデデ…

女 まだそんなすつとぼけたこと言うか。この口か！

男 ちよ、ちよつと、もう勘弁してくださいよ。みんな見てるじゃないですか。

女 そつよ。当たり前じゃない。お客さんは観客席を見に来たんだもん。知らなかったの？ 今夜の主役はあんなのよ。

男 そんなこと言われたって…誰がそんなこと決めたんですか。

女 誰が決めたかって？ そんなことイチイチ説明しなきゃならないわけ？

男 …。

女 あんた芝居見に行ってイチイチ聞くわけ？ この芝居のストーリーは誰が決めたんですか。今の演技はどどういう意味ですか。この芝居のテーマはなんですか。考えたらどうだい、自分で。え？ お客さまは神さまなんだからさ。想像力持ってたんだからさ。残念だけどこれはテレビじゃないんだよ。パイパイ鳴きながら口あけて座ってるだけではないしい餌を運んでくれる、いつまでもそつだと思ったら大間違い。

男 あの、僕、席替わりますから。

女 遅いね。もう手遅れ。この席に座った人が今夜の主役になるって台本にもちゃんと書いてあんの。…正直言ってアタシはあんたでよかったって思ってるのよ。なんかいかにもサツカーやってますみたいなロンゲでピアスした日焼け男が座っててさ、全然芝居に乗ってこなくて「そんなことより彼女、終わったらお茶飲みかない？」なんて言われちゃった日にゃ、バカは芝居見にくくなって怒鳴っちゃうだろつし。あと妙に芝居慣れた評論家風のクソガキが座っててさ、こつちがなに言ってもニヤニヤ笑って滑舌がイマイチですわなんて顔されたら思わず殴っちゃつかもしんないしね。

男 …つまり…あなたは出演者の方なんですわね。

女 あんたバカじゃないの？ そんなことアタシがここで喋り出した瞬間から分かってるでしょ。みんなわかって、頭切り替えてこっち見てるんじゃないの。そうでしょ？ ねえ、あなた。（本当の客に振ってまわる）あなたも。この芝居がどんな芝居かなんて、もうとっくにわかってるわよね？ ホラ、わかってるって顔してるでしょ。

男 え？

女 いいの！ わかっているのよ！ たとえそう見えなくても、この人たちはわかっているふりしてる顔してるふりをしてるの！

男 わかってないってことじゃないですか。イダダダダ…

女 往生際が悪いわね。あんた何年客やってんの？ 観客はわかっているふりをする。役者はわかれてるふりをする。お互いふりをしながらこの世界を生きていく。同じ嘘を共有する。それがあたしたち役者と観客の、つかの間のハネムーンでもないの。

女、手を挙げ、パチンと指を鳴らす。  
何かが始まるような、音楽が流れ出す。